

杖の勇者のお導き

しゅん65

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

死んだと思った私、はいつの間にか異世界に召喚され、杖の勇者として迫りくる厄災に立ち向かうこととなった……！！

* 投稿頻度は少なめです。

* 基本的には原作通りの話になるでしょうが、正史（原作）からかなり離れることになりそうです。

* 時々アンケートで今後の方針について聞くことがあります。

目次

第1話	勇者召喚	1
第2話	召喚された理由 前編	6
第2話	召喚された理由 後編	11
第3話	勇者相談 前編	15
第3話	勇者相談 中編	20
第3話	勇者相談 後編	23
第4話	仲間との出会い 前編	28
第4話	仲間との出会い 後編	31

第1話 勇者召喚

「う、うううん……」

う、頭が痛い。何だか割れるみたい。

……ところでここ、どこだろう？

さっきまで私がいた場所じゃないことだけは確かなんだけど……

っていうか、確かにさっき私は死んだはずじゃあ……

「おお……成功したぞ。」「ああ……」

え？周りに誰がいるの？っていうか誰？

「いや、おかしい。多くないか？」「ああ、なぜ7人も……」

「一体3人もどつから来たんだ？」

何だか騒がしくなりましたね。っていうか、呼び出したのあなたたちでは？

「おおつ、勇者様方ッ！どうかこの世界をお救いください!!!」

「「はい？」」「「えっ？」」

えっ、後ろから声？ってか、まだ周りに誰がいるの？

と私が周囲を見渡してみると、いろいろ分かったことがある。

まず、私が今いる場所は教会のような建物、いやもつと言ったらその地下のような場所である、……と思う。

で、私の目の前にいるのはローブを身にまとった男たちが数名。

一方、後ろにいるのは同じような格好をした男性達が4人、そして女子が私を含めて3人。

「ん……？」

この杖……

ふと自分が杖を持っていることに気が付いた。何だか古めかしい、RPG系のゲームにいかにも出てきそうな感じだ。

っていうか、いつの間に？私こんなもん持つてるはずがないんだけど。

「それはどういう意味ですか？」

4人の男性の中の一人が質問する。

「色々と込み入った事情がありますゆえ、ご理解いただけるとは言い方ですと、勇者様たちを古の儀式で償還させていたいただきました。」

「召喚………」

「色々と事情がありますが、古の儀式によりあなたがた伝説の四聖勇者を召喚させて頂きました。」

「言われてみれば、私たちの足元には何やら魔法陣が光り輝いています。」

「この世界は今、存亡の危機に立たされているのです。勇者様方、どうかお力をお貸しください。」

「そう言い、ローブの男たちが深々と頭を下げてきた。」

「これが無碍にするのは、さすがに良くないですよ………」

「断る。」

「そうですね。」

「元の世界に帰してくれるのか？話はそれからだ。」

「ええっ!!な、なんで断ろうとするんですかあ？」

突然の大声に全員がこちらを振り向く。

「そりゃあそうですね！」

頭を下げている人たちを目の前にそんな風に断るだなんて、あなたたちはそれでも男なんですか？

「ああ、この子の言う通りだ。目の前で助けを求める人がいるっていうのに断るだなんて、お前らホントに男かあ？タマちゃんについてんのか？」

「ちよ、そんな下品なこと言わないでくださいっ！」

「ああ?!お前そんなこと気にしてんのかあ？」

金髪頭のヤンキーみたいな彼女がバシバシ私の頭を笑いながら叩いてきます。

確かに私もさっき似たようなこと思いましたけど？表現とかそういうのかあるでしょうか！

「だってそうだろう。おい、強制的に呼びつけたことに対する罪悪感はお前等にはないのか？」

剣を持った、クールな顔立ちの方が剣の先をローブの男たちに向ける

「仮に、世界が平和になったらポイツと元の世界に戻されてはタダ働きですしね。」

弓を持った、さわやかそうな方も同意してローブの男たちを睨みつけている。

「こつちの意思をどれだけ汲み取ってくれるんだ？話によつちや俺たちが世界の敵に回るかもしれないぜ。」

槍を持った、これまた女にやたらモテそうな方がこちらも槍を男たちに向けて言っている。

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

ナニコレ？

何なのこの人たち？

あきれて声も出ないんですけど?!

7人のうち、3人がこんな調子じゃこの先どうなるんでしょう

か.....

「.....俺は別にいいぞ。話を聞いてやるだけでもいいじゃないか。」

「「えっ」「おっ」

声の方を振り返ると、腕に盾を取り付けている、目つきの比較的鋭いほうが、腕組をしている。

.....腕にそんなもんつけてよく腕組ができますね、この人.....

「どういう意味だ？」

「そのままだ。話だけなら聞いてやる。その上で、俺に何かできそうならば答えてやる。」

「あ、ありがとうございます!!!」

あ、なんだかんだ言いながらこの人は優しそ

「ただし、そっちが俺たちを利用したりはめようとしたら.....」

ギリリと睨みつけて、

「それなりの報いは受けてもらう。その時は容赦しないからな。」

「はっ、はい。」

.....そうじゃなかった。

いや、他の3人よりはマシなのかな？

よくよく表情を見てみると、確かに目つきは悪そうに感じるけど、悪い人って感じまでじゃないですね。

「あなた達、さっきから何、変なこと言ってるのかしら？」

黒く滑らかな長い髪の高貴そうな女性があきれたような声で囁いた。

うわあ、キレイ.....

「ん？どうしたの？」

「あら、あなた達、まるでここが現実起こったかのように考えているみたいだけど、これが単なる夢って考えないのかしら？」

え？

この人、今この状況を夢だと思ってるの？

「はあ?! てめえふざけんなよ。これが夢だった言いてえのか? そっちこそ変なこと言ってるんじゃないやあねえよ!」

「ふふふ、声荒げちゃって。落ち着きがないのね。それともおとなし

くするだけの脳もないのかしら?」

「はあん?!」

「や、やめましようよ一人とも!」

このままじゃどうにもならなさそうなので、とにかく間に入って喧嘩を鎮める。

え?なんで私が鎮めるのか、だって?

肝心の男子たちがこの状況をただ見ているだけだから、ですよ!!!

「と、ともかく!!!」

しょうがないので、私が最終的に仲裁役になることになりました。

「とりあえずまずはココが何処なのか、私たちはなぜここに呼び出されたのか、これからどうすればいいのか。兎にも角にも話を聞いてみないことに変わりありませんよ!」

「はい、まずは我が国、メルロマルクの女王と謁見して頂きたい。報奨の相談などはその場でお願いします」

ローブを着た男の代表が重苦しい扉を開けさせて道を示してきました。

これはもう道は一つしかありませんね。

「……しょうがないな」

「ですね」

「ま、どいつを相手にしても話はかわらねえけどな」

さっきまで文句たらたらだったこの人たちも何とか納得してくれましたよね。

「よっしやあーじゃ行こうぜ。」

「ふん、どうせ夢なんでしょうけど。」

こうして彼女たちも動き始めました。それにしてもまだ疑っているのでしょうか。

こうして私たちはこの薄暗い部屋から出ていくことになりました。

第2話 召喚された理由 前編

薄暗い部屋を出て、古臭い石の螺旋階段を登っていくと、どうやら地下から地表に出たらしくて、窓の外には見たこともないような街並みが並んでいた。

「僕たち、本当に異世界に来たんですね。」

「だな。」

「まだわからないわよ。これがリアルな夢かもしれないのですから。」

「気持ちいい風だな。まるで海外旅行のパンフレットみたいだな。」

「もしかして日本から出たことないんですか？」

「外の風からすると地中海あたりと同じ気候だろう。」

「へいへい、知識も語彙力もなくて悪うございました。」

そんな地下を抜けて外に出た後、大きなお城に入って行って、連れられて、いつの間にか大広間のような場所に到着しました。

そこには、王座に座った2人の王様、女王様のような方と、その周りに多くの人がいました。

「ほう、この者たちが古から伝わる四聖勇者か。しかし、少し数が多くないか？」

「ようこそいらつしやいました。私がこのメルロマルクの女王、ミレリア・Q・メルロマルクと申します。」

「わしがメルロマルクの王、オルトクレイⅡメルロマルク32世だ。勇者たちよ、それぞれの名を聞こう。」

「天木錬^{あまぎれん}。年齢は16歳、高校生。」

クールそうですが、一見取っつきにくそうです。

「俺は北村元康^{きたむらもとやす}、21歳、大学生だ。」

ちよつとチャラそうな雰囲気ですが、親しみやすそうと言ったら親しみやすそうです。

「次は僕ですね。川澄樹^{かわすみいつき}、17歳、高校生です」

まあまあ中性的だと言えばそうなりそうな感じですね。

「私の名前は積田麻衣^{つみきだまい}といいます。17歳の高校生です。」

「じゃ、次はアタシだな。基樹由美^{もとぎゆみ}、18歳、一応フリーターってこと

でよろしく!」

白い特攻服みたいなの着ていますけど、暴走族なんでしょうか……

「……はあ、私は竜宮院美咲。19の大学生。」

お嬢様、つていわれそうないい服装の美人さんですね……

「最後は俺だな。オレの名前は岩谷尚文。いわたになおみ20歳、大学生だ。」

ぱつと見、他の3人と比べて華やかさが少なそうにも感じるし、こちらも見取っつきにくそうに見えますね……

「ふむ。レンにモトヤスにイツキ、そしてマイにユミにミサキか。」

「王様、俺を忘れてる。」「あなた。」

「おおすすめな。ナオフミ殿」

「王様だなんて、駄目ですよ、敬意を払わないと。」

「じゃあ陛下とか?」

「かたつくるしくねえ?」

「じゃ、王ちゃん?」

「はい?!」

「……はあ。あなたやっぱり馬鹿なのね。」

「ふふふ、女王様、王様で構いませんわ。」

ミレリア女王様が笑って答えました。

「さて、まずは事情を説明せねばなりませんね。この国メルロマルク、更にはこの世界全体が今まさに滅びへと向いつつあるのです。」

会話を全てここに記すのはうp主の作文能力からしたら到底無理そうなので、話を簡潔にまとめると、次のようなことらしい。

この世界には終末の予言というものがあり、それによると世界を破壊に導く波っていうのが幾重にも重なって訪れるらしい。

波が振りまく厄災を跳ね除けなきゃ世界は滅ぶらしいです。

各国には龍刻の砂時計っていう道具が古くからあってそれで波が来るタイミングがわかるらしいんです。で、その予言の年が今年であるらしく、予言の通り、古から存在する龍刻の砂時計という道具の砂が落ちだしたらしいのだ。

最も伝承と異なるのは、砂時計が動き出したのがこの国だけという

ことである。

この龍刻の砂時計は波を予測し、約一ヶ月前から警告する。伝承では一つの波が終わる毎に数ヶ月の猶予が生まれる。

当初、この国の住民は予言を蔑ろにしていたそうだ。しかし、予言の通り龍刻の砂時計の砂が一度落ちきったとき、災厄が舞い降り、第1波がこの国を襲った。

次元の亀裂がこの国、メルロマルクに発生し、凶悪な魔物が大量に亀裂から這い出てきたのだ。

その時は辛うじて国の騎士と自国の冒険者たちで何とか最初の波は退けた。

がしかし、第2第3の波はさらに強力なものとなり、波が押し寄せなくなるまで砂時計は砂を落とし続ける。

このままでは災厄を阻止することが出来ない。

しかし、砂時計が動き出したのがこの国だけということもあって、他の国は協力に消極的というか否定的だったという。

それでも、世界最大の国、フォーブレイの協力の元、まずはこの国で四聖勇者を呼び出し、他の国でも砂時計が動き出し次第、各国に派遣する、という形に収まったらしい。

そうして国の重鎮達は伝承に則り、勇者召喚を行った。

というのが事のあらましだそうです。

ちなみにここが異世界なのに相手の言葉が分かるのは私達が持っている伝説の武器にそんな能力があるからなんです。

それにしても……………

ここまでの話を聞いた限りでは、何だか私の大好きだった小説、盾の勇者の成り上がりと何処となく似ているような気がしますねえ……………

ただ、あの小説は実質召喚ものではなく転生ものだったんですけど……………

「話はわかった。で、召喚されてまさか無報酬ってわけじゃないよな。」

「都合のいい話ですね。」

「へっ、言われなくても戦ってやるよ！」

第2話 召喚された理由 後編

「はあ、あなた達何を言っているのよ。国が敵に回って一番困るのは私たちなのよ。」

「そ、そうですね。」

「分かっているよ、それでもこうしないと舐められるだろ?」

「へっ、言われなくても戦ってやるよ!」

その様子を見て、女王様は微笑みませんが、すぐに真剣な表情に戻って、

「しかし………私たちが呼び出したのは剣、弓、槍、盾の四聖勇者なのですが………あなた達は何の勇者なのですか?」

「いや、それを私たちが聞きたいんですけど。」

「アタシらもよくわかんないんだよね〜」

「というより、私たちが持っているモノから仮定することはできないかしら? ほら、剣を持っている天木錬は剣の勇者、槍を持っている北村元康は槍の勇者って感じに。」

「ああ〜。ってことは私は杖を持っているから杖の勇者ってことなの?!」

「正確にはわからないわよ。そんなものを知ることが出来ないのだから。」

「いえ、ありますよ。」

「えっ!!!」

「ステータスを確認すればわかるかもしれないよ。」

「はあ?! ステータスってなんだよ。」

「ええっと……」

も、もしかして、こうかな?

「ステータスツ!!!」

.....

「何やってんの?」

「いや、こうするんじゃないかなって思っただけです!」

うわあ、恥ずかしい。

「何だお前ら、この世界に来て真っ先に気づくことだろ。気が付かなかったのか？」

「知るかよ！なんだよその情報通って顔は！」

「視界の端にアイコンが無いか？」

「あつ、ありました！」

言われてみれば、確かに視界の右下、ほんとに小さくそこにポツンとありました。

「それに意識を集中するようにしてみる。」

言われた通りにやってみますと……………

プウーン

「わっー！」

積田麻衣

♀ Age 17

杖の勇者 Lv. 1 Exp. 0/20

Max HP XX Max MP XX Max SP XX

0

ステータス 攻撃力 XX 魔力 XX 物理防御力 XX 魔

法防御力 XX 俊敏 XX

属性 火 XX・雷 XX・水 XX・光 XX・闇 XX・風

XX・土 XX

装備 ステッキ 異世界の服

(XXにはちゃんと数字が書かれています。うp主が決めるのがめんどくさかったです。)

「あの…………私はどうやら『杖の勇者』っていうらしいです。」

「あく、なんかアタシは『拳の勇者』って。」

「私は『書の勇者』ね。」

「ふむ……………」

何だか王様が少し嫌な顔をしていますますが、どうしたんでしょうか？

「それにしても、Lv1ですか…………これは不安ですね。」

「そうだな、これじゃあ戦えるかどうか分からねえな。」

「といひかなんだコレ。」

「勇者殿の世界では存在しないので？ これはステータス魔法というこの世界の者なら誰でも使える物ですぞ。」

「へえ、そうなんですか。」

「それで、俺達はどうすれば良いんだ？ 確かにこの値は不安だな。」

「ふむ、勇者様方にはこれから冒険の旅に出て、自らを磨き、伝説の武器を育てて強化していただきたいのです。」

「最初から強いわけじゃないのか……」

「まっ、使い物になるまで、他の武器とか使えばいいんじゃないか？」

「元康さんがかつこつけたように槍を振り回してポーズをとりました。」

「あら、ちよつと待つて。」

「先ほどからずっとステータスを眺めているようにしていた美咲さんがつぶやきました。」

「ん？ どうした？」

「よく調べてみたのですが、これによると私たち勇者は他の武器を使用できないみたいですよ。ほら、ここに載っております。」

「「「「えっ？」」」」

「と言われて私もヘルプの中から探してみますと……」

注意：勇者は自分の所持する伝説武器以外を戦闘に使うことは出来ない。

「とするとじゃあ、この武器を育てて冒険していくのがいいみたいですよ。」

「ちよつと待ちなさいよ。」

「どうした？」

「そりゃああなたたち5人は立派な武器をお持ちでしょうけどね、私と彼は本と盾なのよ。これでどうやってモンスターと戦えって言うのかしら。本と盾で殴れ、とでも言うのかしら？」

確かに言われてみればその通りである。

「そこは後々、片付けて行けば良いだろ。とにかく、頼まれたのなら俺達は自分磨きをするべきだよな。」

「ひたすらレベル上げですね。」

「じゃあ私たち7人でパーティーを結成しましょう！」

「お待ちください勇者様方。」

なんだかいい雰囲気になった感じが進みそうでしたが、ここで大臣のような人が会話に入ってきた。

「勇者様方は別々に仲間を募り冒険に出る事になります。」

「それは何故ですか？」

「はい。伝承によると、伝説の武器はそれぞれ反発する性質を持っておりまして、共に行動すると成長を阻害するといわれております。」

確かに調べてみますと………

注意：伝説の武器を所持した者同士で共闘する場合、反作用が発生します。

なるべく別々に行動しましょう。

「日も傾いてきておる。今日はゆっくり休み明日旅立つ。勇者の仲間はこちらで逸材を用意しておく。」

それに合わせて、どこかからいかにも女騎士！って感じの人が来られました。

「お部屋をご用意しております、こちらへどうぞ。」

第3話 勇者相談 前編

「やっぱ伝説の勇者となると待遇が良いな。案内してくれた子も可愛かったし。」

「出された料理も不思議な味だったけど豪華でしたね。」

私たちはその後、料理をごちそうしてもらい、一先ず全員で同じ部屋に集まっていました。

「なあなあ、俺たちホントにゲームの世界に来たみたいじゃねーか。なあ、そう思うだろう?」

「ああ。」

由美さんがつぶやいたのを元康さんが軽く返事をしましたが、皆さん夢中で聞こえていないみたいですね。

「つてというかゲームじゃね? 俺は知ってるぞ、こんな感じのゲーム。」

「「え?」」

え、え、え、え?

この世界がゲーム?

「というか有名なオンラインゲームじゃないか、知らないのか?」

「いや、俺も結構なオタクだけど知らないぞ?」

「お前しらねえのか? これはエメラルドオンラインっていう有名タートルじゃねえか。」

「何だそのゲーム、聞いたことも無いぞ。」

「お前本当にネットゲやったことあるのか?」

「確かに言われてみれば似たようなシステムのゲームはやったような気もするが、俺が知ってるのはオーデインオンラインとかファンタジームーンオンラインとかだよ、そっちの方が有名じゃないか。」

「なんだよそのゲーム、初耳だぞ。」

「「え?」」

「皆さん何を言っているんですか、この世界はネットゲームではなくコンシューマーゲームの世界ですよ。」

「何だよ、そのこんしゅーまーゲームってゆーのは。」

「家庭用ゲーム機のことかと思いますが。」

「違うだろう。VRMMOだろ?」

「はあ? 仮にネットゲの世界に入ったとしてもクリックかコントローラーで操作するゲームだろ?」

元康さんの問いに鍊さんが首をかしげて会話に入ってくる。

「クリック? コントローラー? お前ら、何そんな骨董品のゲームを言ってるんだ? 今時ネットゲームと言ったらVRMMOだろ?」

「VRMMO? バーチャルリアリティMMOか? そんなSFの世界にしかないゲームは科学が追いついてねえって、寝ぼけてるのか?」

「はあ!?!」

鍊さんが声高々に異を唱える。

一体どういふことなのでしょう?

そもそもこれってどちらかといえば.....

「ねえ、皆さん。この世界はどちらかと言えば小説の中の世界じゃないでしょうか?」

「あら、そう言われてみれば、そんな小説、見たことがありませんわね。」

「そうそう! 『盾の勇者の成り上がり』ですよ!!!」

「.....ん? 『四聖武器伝記』じゃないかしら?」

「???何ですかそれ、聞いたことありません。」

「わたくしだってあなたのその小説聞いたことがありませんわよ。」

「ああいえ、これは小説ではないんです。あーどちらかと言えばライトノベルでして。」

「なあなあ、お前らはさつきから一体何の話をしてるんだあ? これって『四宝英雄伝説』の世界じゃねえのか? ほら、あの映画の。」

「なんですの、それ。」

「んだあよお、結構有名な映画だぜ。つーか、あんたらの言ってるやつの方が知らねえや。」

何だか話がおかしくなってきました.....

「あの.....皆さん、この世界はそれぞれなんて名前のゲームだと思っ

ているのですか？あ、ちなみに自分はディメンションウェブという
コンシューマーゲームの世界だと思ってます。」

樹さんが軽く手を上げて尋ねます。

「ブレイブスターオンライン」

「エメラルドオンライン」

「知らない。ってかゲームの世界なのか？」

「確かに………これ、ゲームの世界なんですか？」

私だつて人並みに、いやオタク並みにゲームの知識は持ち合わせて
はいるが、皆さんの言うようなそんなゲーム聞いたこともない。

「まてまて、情報を整理しよう。」

元康さんが額に手を当てて俺達を宥める。

「錬、お前の言うVRMMOってのはそのまんまの意味で良いんだよ
な？」

「ああ。」

「樹、尚文。そして、麻衣ちゃん、由美ちゃん、美咲ちゃん。みんなも
意味は分かるよな？」

「SFのゲーム物にあつた覚えがありますね。」

「ライトノベルとかで読んだ覚えがある。」

「あつ、私もです。」

「工学的な考えからは一通り。」

「あー、アタシはよくわかんねーや。」

「まあ、簡単に説明するならば、プレイヤーがゲームの世界に直接入り
込んで遊ぶタイプのゲーム、って言った感じかしら。」

「そこでは世界がリアルに感じられて、感覚が現実のように感じられ
るんですよね？」

「ええ、そうね。そういったところかしら。」

「マジかよ、すげー」

「そうだな。俺も似たようなもんだ。じゃあ錬、お前の、そのブレイブ
スターオンラインだっけ？それはVRMMOなのか？」

「ああ、俺がやりこんでいたVRMMOはブレイブスターオンライン
と言う。この世界はそのシステムに非常に酷似した世界だ。」

錬さんの話を参考にすると、VRMMOというものは錬にとって当たり前のようにある技術で、脳波を認識して人々はコンピューターを作り出した世界へダイヴする事ができるらしいです。

「それが本当なら、錬、お前のいる世界に俺達が言ったような古いオンラインゲームはあるか？」

錬さんは首を横に振ります。

「これでもゲームの歴史には詳しい方だと思っているがお前達が言うようなゲームは聞いたことが無い。お前達の認識では有名なタイトルなんだろう？」

錬さんの問いに私たちはうなずきました。

「ん？じゃあ麻衣ちゃんたちはどうかかな？」

「私がよくプレイしていたのはプリンセスコネクトとかマインクラフトっていうオンラインゲームですね。」

「私はそもそもネットゲームなんてやったことがないし、興味もないからわかりませんわ。」

「あつ、それアタシも同じー！」

「う~~~~~ん。」

「念のため一般常識の確認だ。今の首相の名前は言えるよな。」

「ああ」

「お、おう……自信ねーけど……」

「はあ?! 自信持ちなさいよ! っていうか、常識でしょ!!!」

「わ、わかりました。」

「一斉に言うぞ。」

せーの

「湯田正人」

「谷和原剛太郎」

「小高縁一」

「壺富士茂野」

「岸本祐介」

「高橋聖子」

「河口太郎」

「『誰?!』」

「う、うそでしょ……」

美咲さんがショックを受けたように絶句していますが、やはり皆さん同じ気持ちのようですね。

「じゃ、じゃあ千田札に描かれている人は?」

「去年の流行語大賞は?」

「好きな声優は?」

「有名なアニメ映画は?」

「第二次世界大戦はどの国が勝った?」

「つい最近のオリンピックはどこでやってたか?」

「一様聞いておくけど、元素記号34番は何かしら?」

こうして私たちは話し合うことにしました。

歴史的な大きな事件から、ゲームをはじめとしたサブカルチャー的な事に至るまでいろんなことを話し合いました。

第3話 勇者相談 中編

その結果、私たちはある結論に辿り着いた。

「どうやら、僕達は別々の日本から来たようですね。」

「そのようだ。間違っても同じ日本から来たとは思えない。」

「異世界の日本も存在する訳か。」

「パラレルワールドと言われる多元宇宙がいくつも存在するという話は聞いた事もあったけど……まさか本当に実際するなんてね。」

「マジかよ……すげえな。」

「時代が違うだけだと思ったが、幾らなんでもここまで符合しないとなるとそうなるな。」

「このパターンだとみんな色々な理由で来てしまった気がするのだが」

「例えばどんな感じで、ですか？」

「あんまり無駄話をするのは趣味じゃないが、情報の共有は必要か。」

「俺は学校の下校途中に、巷を騒がす殺人事件に運悪く遭遇してな、」

錬さんが話し始めました。

「ふむふむ」

「一緒に居た幼馴染を助け、犯人を取り押さえた所までは覚えているのだが……」

脇腹をさすりながら話していますが……おそらく刺されてしまったのでしょうか。 かわいそうに……

「そんな感じで気が付いたらこの世界に居た。」

「そうかそうか、幼馴染を助けるなんてカッコいいシチュエーションだな。」

尚文さん、嫌みっぽく言わないで上げてください。

「じゃあ次は俺だな。」

軽い感じで元康さんが自分を指差して話し始めます。

「俺はさ、ガールフレンドが多いんだよね。」

「ああ、そうだろうよ。」

「ですから、苦虫を噛み潰したような顔しないでくださいよ！尚文さん!!!」

「それでちよーつとね、」

「二股三股でもして刺されたか？」

鍊さんが小ばかにするように尋ねる。

すると元康は目をパチクリさせて頷きました。

「いやあ……女の子って怖いね。」

「ちつ、くっだらねー!」

由美さんが呆れたように天井をあおいでいますが、私と美咲さんも同じ気持ちのようです。

あ、尚文さんが中指を………

いくらイラつくからって立てないでください!

「次は僕ですね。僕は塾帰りに横断歩道を渡っていた所……突然ダンプカーが全力でカーブを曲がってきました、その後は………」

あ、察し。

それにしても、ダンプカーに引かれて転生だなんて………
異世界転生の王道パターンじゃないですか。

「次は私ですね。私は学校からの帰り道、道を歩いているときに頭上から鉄骨が降りかかってきたところまでは覚えているのですが………」

「いやそれ、ぜってー潰されてペチャンコにされてんじゃねーか。」

そのようですね。

「んじやあアタシだな。まあアタシはこれでも地元じゃ有名な走り屋でなー。」

「あら、思いつ切り違法行為の犯罪者じゃないの。」

「うっせーな!!!……まあ、そんなアタシが他の地域の暴走族のヘッドとタイマン張ることになってよー」

第3話 勇者相談 後編

「つーかさ、このステータスって奴、全然意味が分かんねえんだけど。」
「あつ、私分かりますよ。ですよね皆さん。」

「当たり前だ。」

「攻略サイトを見なくても良い程度には熟知してますから。」

「ゲームでよくある形式だしな。」

「想像で何とか分かるわね。」

「はあ?!じゃ、じゃあ、このピーエイチっていうのは」

「それ、HPでしょ。pHじゃ水素イオン指数で理化学の分野になっちゃうわよ。」

「それはいわゆる体力みたいなものですね。魔物から攻撃を受けたりしたら減っていく感じですよ。」

「じゃ、MPっていうのは?」

「魔力ですね。魔法なんかを使うのに必要となってきましたね。」

「SPは?」

「それは何か技なんかを使うために必要となるものですね。所謂勇者特有の魔法とかでしょうか?」

「Expは?」

「経験値ですね。魔物を倒すたびにそれが増えてきて、一定数貯まるとLv、レベルが上がっていくんです。そうするとできることが増えていく………って感じでいいでしょうか?」

「いいんじゃないか?」

「それにしても何でお前たちだけそんなに詳しいんだよ………」

「………やっぱり盾だからでしょう。」

「あつ、やっぱりそう思う?」

「まっ、当然だろう。」

「え、え、えっ!皆さんの世界って盾はなんか駄目なんですか?」

「そんな………私の知っている小説では主人公にもなっているほどの………」

「よし、この元康お兄さんが常識の範囲で教えてあげよう。」

元康さんが親切そうに話し始めました。

一方の当事者でもある尚文さんは見えないうようにすこし嫌そうな顔をしています。

「まずな、俺の知るエメラルドオンラインでの話なのだが、シールダー……盾がメインの職業な」

「ああ……」

「最初の方は防御力が高くて良いのだけど、後半に行くに従って受けるダメージが馬鹿にならなくなってな、」

「ああ……」

「高Lvは全然居ない負け組の職業だ。」

「……」

「……」

尚文さんがショックで悶絶しています!!!

まあ、そうですね。こんな話を聞かされたら。

「アップデート！アップデートは無かったのか!？」

「いや、システムのにも人工的にも絶望的で、放置されてた。しかも廃止予定だったしなあ……」

「転職は無いのか!？」

「その系列が死んでるといふかなんていうか。」

「スイッチジョブは?」

「別の系統職になれるネットゲじやなかったな。」

「お前らの方は?」

慌てて尚文さんが鍊さんと樹さんのほうに目を向ける。

すると二人ともサツと目を逸らして、

「悪い……」

「同じく……」

由美さんも苦々しそうに、

「アタシもそんなに知らねえなあ……影薄かったってゆーかなんてゆーか……」

途端に少し悪い空気が漂い始めました。

そんな空気に耐えられないので、すかさず私が持っている知識で場

を和ませようとしています。

「あの、私が読んだ小説の中では盾の勇者は防御力はピカ一で、ありとあらゆる攻撃を跳ね返す、って書かれてましたよ。」

それに美咲さんも援護してくれました。

「そうね、どんな状況下でも生き残ることができるとも書かれてあつたわね。」

「それに盾は仲間を回復させたり、一時的にですけど仲間を強化することもできるんです。」

「防御担当で回復と援護か……盾職と見るよりもハイブリットの援護職……僧侶と見た方がいいかもしれないかもな。」

「そうですね。援護職となれば別ですよね。」

「まあ、確かに攻撃力は全くと言っていいほどないですけどね。最弱の魔物を倒すのにも何十回と攻撃しないと倒せませんし……」

「出来れば防御だけでも最強の一角の方でお願いしたい!」

尚文さんがお願いするかのよう祈りました。

何だか空気が重くなりそうになってき始めたので、ここは私が何とかしますか!

「よし、分かりました。それでは私が改めて確認も兼ねてこの世界での過ごし方を私が知っている範囲内で説明しましょう!」

「頼むっ!」

「まず、この世界では魔物などを倒すことによって経験値的なものを集めて、レベルを上げるわけです。そうすることによってこの武器も成長して、いろんなことが出来るようになるんです。」

また、魔物の死骸なんかをはじめとした素材を吸収させることで武器の種類を変えることもできるんです。

そして、この伝説の武器の特徴として、同じ系統の武器に触れることによってその武器を使うことが出来るんですよ。」

「そうなのですか? 僕の知っているディメンションウエーブとは少し違う気がします。」

「そうなんですか?」

「そうだな。俺の知っているブレイブスターオンラインとも違うな。」

「おそらく多少の誤差はあるのでしよう。まあ、これからヘルプを見ながらその時その時で対処していけばいいだけの話でしょうね。」

元康さんがそこにあつた地図を広げて声を掛けました。

「地形とかどうよ。」

「名前こそ違うが殆ど変わらない。これなら効率の良い魔物の分布も同じである可能性が高いな。」

「あつ、それ私も同じです。」

「武器ごとの狩場が多少異なるので同じ場所には行かないようにしましょう。」

「そうだな、効率とかあるだろうし。」

「そうこうしていると、いつの間にか美咲さんのため息が聞こえてきました。」

「はあ……………ここまでくるとどうやら夢ではないようね……………ですがこれも神のお導きなのでしょう……………」

今まで夢だと思つてたんですか。

それにしても……………

明日からこの異世界での大冒険が幕を開けるのですね。

それも私のよく知る世界で。

なんだかドキドキしてきましたあ!!!!!!

周りを見渡せば……………

地図を目の前にして明日の狩場について話し続けている錬さん、樹

さん、元康さん。

バルコニーから空を見上げている尚文さん。

何故かいきなりシャドーボクシングを始めた由美さん。

なにか十字架のようなものを両手に掲げている美咲さん。

私も何だか明日が楽しみになってきましたあ!!!

「ところで、この世界、お風呂はありますかね?」

「中世っぽい世界だしなあ……………行水の可能性が高いぜ。」

「言わなきゃ用意してくれないと思うな。」

「まあ、一日位なら大丈夫か。」

「大丈夫なわけないじゃないですか！」

「アタシは大丈夫だぜ。」

「はぁ……………麻衣さん、もう今日は我慢しましょう。」

「はい……………」

そうこうしているうちに異世界の夜は更けていった。

第4話 仲間との出会い 前編

翌日。兎にも角にも朝食を食べた後、ドキドキしながら待つこと、しばらくしてなんでも10時ぐらいになった頃、再び私たちは昨日の場所に呼び出しを受けました。

「勇者様のご来場。」

そう言われて扉が開くと、昨日の場所に新たに様々な冒険者の格好をした人たちが集まっていました。

あそこにいるのが、私たちの仲間になる人たちですか………ん？18人？7人で分けられないのですか？

まあ、私達なんか急に来ちゃったみたいですし、そちら側も急に集められないですよね………

「伝説の勇者たちとともに波に立ち向かおうと言うものを募らせていただきました。」

「それでは、誠に勝手かもしれませんが………」

女王が何か言おうとしています、王様が

「さあ、未来の英雄達よ。仕えたい勇者と共に旅立つのだ！」

え、しかも向こうが選ぶのですか？

まあ、それでいいですけど………

「なあ、どう思うんだ、これって？」

「異世界のよく分からない方を選ばせるよりも自国民の方に重きを置くことは間違っではないんじゃないかしら。」

「まっ、それもそだな。」

で、その結果、

天木 錬 5人

北村 元康 4人

川 澄 樹 4人

岩谷 尚文 1人

積田 麻衣 2人

基 樹 由美 0人

竜宮院 美咲 2人

「ふむ……その上、杖の聖武器というのは聞いたことがあるが、その杖は杖の聖武器とは似ても似つかぬ。それに加え、書も日本や拳の聖武器というのには聞いたことがない。ともなると生娘どもが勇者というのも怪しい話になってくるの……」

「はあ?! んだごらあ!! 呼び出したんはそつちじゃねくか!! なんか文句あんのかゴラア!!」

「……まったく野蛮ですわね。とはいえ、杖が存在する? 似ても似つかぬ? どういうことかしら……」

「どうかの、ミレリア。こやつらは信用するに値するかどうか。」

「怪しい。確かにその通りなのかもしれませんが。ですが、彼女たちも召喚された方々、それだけで信憑性は大きいにあるかと。それに今は誰が偽物かとかそのことについて言い争っている時ではないでしょう。」

「じゃ、じゃが伝承に全くない……」

「私は伝承が全てとは思いません。後世に書き残す際にどうしても消失してしまわれることが必ずしもないと断言できません。それにしても……オクトグレイ、もしかすれば私たち、いえ、ここにいる全ての者はこの瞬間、新たな勇者様方の旅立ちの日に携わることになる云々かんぬん……(ミレリア女王の熱弁を文章にすること作者が諦めたためこのような形にさせていただきました。)」

「……えーつと、なんか勝手にあちら側がテンション上げまくってますが、これはどちら側は反応すればいいのでしょうか?」

「ごほん、ごほん。」

「ごほん。それでは改めまして、伝承にあらぬ新たな聖武器の勇者方。これからよろしく願います。」

美咲さんの咳払いによつてようやく落ち着かれたみたいです。

第4話 仲間との出会い 後編

ところで、私のところに来てくれた人たちはどのような人たちなんでしょう？ちよつとよく観察してみましようか？

2人のうち、男性と女性、といった感じですかね。

男の方は、私よりも少し年上な感じで、大きめの槍を担いで、耳にカフスをつけていますね。何故か尚文さんの方をチラチラ見ている、気になっているみたいですけど……じゃあ何で私の方に来たのでしょうか？

女、というより女の子の方は、私より少し年下に見えて、赤を基調としたいかにも魔法使いの女の子みたいな服に右目に眼帯のようなもの、左腕に包帯となんだか中二病臭い何かが混ざったような雰囲気醸しでしていますね。

そんな槍を担いだ男の人が視線を向けている尚文さんの方には、女性一人がいますね。ぶかぶかのフードをかぶっているからなのか顔含めてよく分かりませんが。

「いやまあ……偏るとは……なんとも……」

「均等に人ずつ分けたほうが良いのでしょうか……無理矢理では土気に関わりそうですね。」

そんなこんなで悩んでいると、由美さんが、

「あくアタシは大丈夫だぜ。このままでも。」

「えっ!!!で、でも一人つきりで大丈夫なんですか？」

「あ？ああ、これからアタシ自身で集めていきやいいんだろ？」

「まあ、そうなるんでしょうけど……」

「つーか別にいなくてもよくないか？」

「そ、そこまでは……」

それを見ていた女王様はいったん息をついて、

「しようがありません。イワタニ様、モトキ様はこれから自身で気に入った仲間をスカウトして人員を補充するように。月々の援助金を配布しますが、代価として他の勇者よりも今回の援助金を増やすことにしましょう。」

そう女王様が言われると、

「それでは支援金です。イワタニ様、モトキ様には銀貨800枚、他の勇者方には銀貨600枚用意させていただきました。」

そうすると今度は

「それでは次に勇者様方には目の前に用意された水晶玉を覗いてもらいましょう。」

と、女王様が言われると、目の前には水晶玉を持った方々が現れていました。

「これは一体?」

「これは勇者様方の魔法適性を診断する魔道具です。魔法適性を知ることが出来ます。」

目の前にいる水晶玉を持った人が教えてくれました。

「じよ、女王陛下! す、水晶玉が!! い、いくつもの色に光り輝いています!!!」

「何だと?!」

王様が驚いているみたいですけど……あつ、そういえば小説だったら一人が使える魔法の種類は大体2つだったような……つてええ?!

「ええええええ?!」

「女王様、こちらもです!!」

「あら。」

どうやら美咲さんも私と同じようです。

「あの……拳の勇者様の方は……その……何
といたしますか……」

「どうしたのです。」

「水晶玉が光り輝きません!!!」

「ん?」

一方の由美さんは水晶玉を両手でブンブンゆすつています。

これがこの場が沈黙で満たされていくということなんですか……

「わ、分かりました。それでは次はこちらを。」

それを合図にまた水晶玉が取り出されました。

「で、こっちは？」

「はい、こちらの水晶玉にお触れになってください。」

そう目の前の人に言われたので触れてみると、目の前に

新しい魔法が解放されました。

ファストアクア

なんていう表示が昨日のステータスが出た時と似たように現れた。

「こちらの水晶玉は魔法が封じられておりまして、触れることで習得することが出来ます。」

「申しありませんが、ツミキダ様とリュウグウイン様は適性のある魔法がいくつもあるため、余った水晶玉を使ってもらいます。モトキ様におきましては水晶玉を授与致します。今後、仲間にお役立てください。」

「それでは、勇者様方によき旅立ちを。」

という女王様の笑顔とともに解散のような出発となりました。………こういう表現でよかったつけ？

とはいえ、まずは仲間になってくれた人たちに自己紹介ですね。

「あの〜はじめまして。私、一応杖の勇者の積田麻衣といいます。これからよろしくお願いします。」

「こちらこそよろしくつす。ああ、俺の名前はカイトとでも呼んでくれつすよ。」

「ふふふふふ………我が名はどれみふあー！この災いが迫りゆくこの世界を救う勇者の仲間となるものである！！杖の勇者麻衣殿よ、我があなたを選んだことを後悔させないことをここに誓いましょう！！」

「あ〜〜はい、これからよろしくお願いします。」

「おい、ちよつと引き気味じゃないつすか。悪いな、こいつこういう性格だから。気にすんなつていう方が無理あんけど、どうかよろしくな。」

こうして、私の異世界での第一歩が開かれました。